

グエン・ヴァン・ヴィンとフランス —インドシナにおけるベトナム人知識人による 新聞出版をめぐる—

河野美奈子

Abstract: In this study, through the analysis of the journals written by the Vietnamese intellectual Nguyen Van Vinh (1882-1936), we will attempt in this study to shed light on certain aspects of Vietnamese nationalism as manifested in French Indochina.

With the publication of numerous magazines and newspapers, such as *La Revue Indochinoise* (東洋雑誌) or the newspaper *Trung Bac Tan Van* (中北新聞), Vinh has worked to encourage the modernization of Indochina, especially Vietnam. This intellectual is also known to have participated in the spread of the ‘*quoc ngu*’, that is to say, the romanization of the Vietnamese alphabet. However, despite all his efforts, Vinh was relegated to the periphery of Vietnamese history and did not receive the esteem of his people because he was seen as a pro-France intellectual. Despite that, it appears to us that to this day the complex thought of this intellectual has not yet been studied in depth. Indeed, we think that the opinions in favor of the modernization of Vietnam written by Nguyen Van Vinh in the newspapers he has published do not allow to rank him so easily in the camp of pro-French Vietnamese intellectual. Therefore, in this article, while trying to determine the place of Vinh among Vietnamese intellectuals who supported the modernization of Vietnam, we will also analyze the various publications directed by this intellectual in order to show how his ideas were more complex than we thought.

Keywords: グエン・ヴァン・ヴィン、ベトナム人知識人、仏領インドシナ、植民地研究

はじめに

本研究の目的は 20 世紀初頭に作家、ジャーナリスト、翻訳者として活躍したグエン・ヴァン・ヴィン (Nguyen Van Vinh, 1882-1936) の足跡を辿り、彼の出版物を検討することにより、仏領インドシナ (1887-1954) においてベトナムの知識人たちがナショナリズムを確立するためにいかに奔走したのかを探ることにある。

ヴィンはフランスがハノイに創設した最初の官吏養成学校である通訳学校を卒業し、インドシナ政府のもとで働いたあと、ジャーナリストになった人物であり、インドシナにおいてフランス式教育を受けた初期の知識人である¹⁾。彼はベトナム語をローマ字化したクオックグーの使用を推奨し、クオックグーとフランス語による雑誌や新聞を数多く出版した。しかし、長い間

1) ハノイの通訳学校 (Collège des interprètes) は 1886 年に創立された。Van Thao Trinh, *L'École française en Indochine*, Kartahla, 2000, p.107.

ベトナム本国において彼の業績は高い評価を得ていなかった。なぜならフランス文化への同化こそがベトナムを近代化すると考えていたヴィンは親仏主義者とみなされていたからである。しかし近年ヴィンの功績は再評価されており、2013年にはグエン・ラン・ビン (Nguyen Lan Binh) 編集による『グエン・ヴァン・ヴィンとは何者か?』(Nguyen Van Vinh la ai?, 2013) が出版され、グエン・ヴァン・ヴィンへの評価は変わりつつある。確かにベトナムがフランスと肩を並べるために「ベトナム人がフランス化」することの必要性を説いたヴィンは、フランスからの独立戦争を起こし自身の独立を獲得したベトナムにとって都合の悪い人物であったことは想像に難くない。しかし、ヴィンのフランスへの眼差しはフランス文化への単純な礼讃ではない。そこにはフランスへの憧憬と対抗、そして自国ベトナムへの愛国心とさらに、阮朝とそこに仕えていた儒学者達への抵抗があったと考えられる。

彼の複雑なナショナリズムを明らかにするために、まずグエン・ヴァン・ヴィンの足跡と彼を取り巻く20世紀初めのベトナムにおけるナショナリズム運動について取り上げたい。次にヴィンが使用を推奨したクオックグーについて考察し、最後にヴィンが主筆として出版した新聞『中北新聞』(*Trung Bac Tan Van*, 1915-1945)と『アンナン・ヌーヴォー』(*Annam Nouveau*, 1931-1942)について取り上げたい。前者はベトナム初の日刊新聞であり、後者はフランス語による新聞である。フランスのインドシナ支配が隆盛を極めた1930年代にできた『アンナン・ヌーヴォー』はクオックグーが広まっていた時代に、なぜフランス語で書かれる必要があったのか探っていきたい。

1. グエン・ヴァン・ヴィンとは何者か?

グエン・ヴァン・ヴィンは1882年にトンキンのハドンで生まれた²⁾。彼の両親に関する詳細な記録はないが、「貧しい農家出身」とされている³⁾。10歳ですでにフランス語を会得しており、彼が14歳の1896年にフランス政府による官吏養成学校の通訳学校を首席で卒業した。インドシナで作られた新しいバカロレアに合格した後、ラオカイ、キエンアン、バクニン、のフランスの行政機関で働き、1904年にはハノイの裁判所に勤務した。特にキエンアンでは多くの外国人と接点を持ち、この時期に英語と中国語も学んでいたと言われている⁴⁾。フランス当局で働き、多くの外国人と交流することにより、ヴィンはベトナムが近代化を遂げるためには雑誌や新聞の発行が必要だと考えた。その後彼は1906年に公務員を辞め、出版の世界に足を踏み入れた。彼は宗主国フランスの文化、出版技術を学ぶためフランスへいくことを強く望んでいた。その願いが叶い、1906年にヴィンはマルセイユで行われた植民地博覧会のインドシナ代表団に選ばれ、フランスへと派遣されたのである。フランスの滞在はヴィンにとっては非常に刺激的なもので、特に文学や演劇などの芸術に触れたことにより、フランスに倣うことでベトナムが近代化するという確信を強めたのである。彼は帰国後出版の重要性を再認識し出版所の建設と西洋式の出版技術の習得に没頭する。

彼が雑誌・新聞の出版に奔走していた1900年代の始めはベトナムのナショナリズムにおい

2) トンキンはハノイの旧称であり、インドシナ時代はハノイを中心としたベトナム北部の保護領を指す名称としても用いられた。ハドンは現在のハノイ市ハドン区。

3) Christopher E. Goscha, «Le barbare moderne»: Nguyen Van Vinh et la complexité de la modernization colonial au Vietnam, *Outre Mers. Revue d'histoire*, Société française d'histoire des outre-mer, Paris, 2001, p.324.

4) *Ibid.*, p.324. ラオカイは現在、ベトナム西北部に位置するラオカイ省の省都。キエンアンはハイフォン市の1つの区となっている。バクニンはハノイ市近くのバクニン省の省都。

て新しい波が起きた時代だった。1887年にフランス領インドシナ連邦が成立する以前から、各地で独立運動が起きていた。とくにベトナムでの阮朝時代の儒教知識人が1885年に勤皇蜂起を先導し王朝の復権を図っていた。そのため、フランスがインドシナにおいて力を強めると、フランス当局は伝統的知識人たちの影響力を弱めることに力を注いだ。そして最も重要視したのが、伝統的知識人たちにとってかわる人材を育てるための教育の分野である。フランス当局が育成しようとしたのは、インドシナでフランスのために働く人物であった。ハノイ最初の官吏養成学校を卒業したヴィンが活躍し出した時期はまさにフランス式教育を受けた新知識人が時代の中心となるようとしている時代だった。そして彼らはフランス当局の役人になるだけではなく、植民地におけるベトナムのアイデンティティをいかに確立していくのかを模索した。ヴィンもまた印刷に力を注ぐなか彼らの活動のなかに身を投じていくことになる。

この時代で有名な活動はファン・ボイ・チャウ (Phan Boi Chau, 1867-1940) が主導する「東遊運動」だが時を同じくして別の流れが展開されていた⁵⁾。それがファン・チュウ・チン (Phan Chau Trinh, 1872-1926) を代表とした「ドンキン義塾」の創設である。ファン・チュウ・チンはファン・ボイ・チャウと同年代の知識人で両者は同じく儒教知識人の家に生まれ、科挙に合格した伝統的知識人の側面を持っているが、共にインドシナ政権下では儒教的価値観によるベトナムの近代化には限界を感じていた。ファン・チュウ・チンは、フランスの教育を受けた新知識人を集め、西洋の思想や技術を取り込むことで、ベトナムの近代化を図ることを目指した。これは儒教的価値観を捨て去り、フランスではなく日本に倣うことでベトナムの近代化を目指した「東遊運動」とは異なる流れである。

ヴィンはファン・チュウ・チンの目的に賛同し、ベトナム人による西洋教育を教える学校「ドンキン義塾」の創立にも力を注いだ。学校創立にあたりフランス当局との交渉にヴィンが多大な貢献をしたのも、彼がかつて役人であったことが大きく関わっていることは想像に難くない。ヴィンと彼の仲間の奔走により西洋文明を学び、ベトナムの近代化を目指す「ドンキン義塾」は1907年の3月に開校することになった。「ドンキン義塾」では漢文、フランス語、とくにクオックグーと言われるベトナム語をアルファベット表記にした国語を中心に、幅広い分野を学ぶことができた。さらに、日本へ留学する「東遊運動」運動よりも安上がりであったことから順調に生徒数を伸ばしていった。加えて、これまでの儒教的特権階級からの脱却を図り、学問を一握りのエリート層だけのものとせず、広く労働者階級からも生徒を募ったことも生徒が増えた要因と考えられる。

一時は700人近くの生徒が通った「ドンキン義塾」であったが、その開校期間は非常に短かった。当初は静観していたフランス当局は「ドンキン義塾」の活動を不安材料とみなし、1907年11月に閉鎖を命じた。1908年に起きた農民一揆の関係を疑われ、ファン・チュウ・チンが逮捕されたことにより「ドンキン義塾」は完全に終わりを告げた。

以後ヴィンは啓蒙運動である「ドンキン義塾」運動から一線を画し、出版による近代化を目指す。

ヴィンは1910年代からフランソワ＝アンリ・シュナイダー (François-Henri Schneider) の元で印刷技術を学んだ。シュナイダーは1851年にパリで生まれ、1882年にサイゴンの印刷所に採用されインドシナへと渡った人物である。彼は翌年トンキンの責任者として赴任し、1885年に印刷所を買取った。1910年の初めにはすでに有名な印刷所となっていたシュナイダーの

5) 東遊運動はファン・ボイ・チャウによって先導されたベトナム独立運動。若い指導者を育てるため、当時日露戦争で勝利した日本に留学生を送った。中国文化圏の儒教的価値観やイデオロギーから脱却し、日本から近代化を学び、フランスの支配から独立することを目指した。

印刷所で、ヴィンは1913年にローマ字化されたベトナム語による最初の雑誌『インドシナ雑誌』(*Revue indochinoise*, 1913-1919)を発行した。『インドシナ雑誌』は、ファン・ボイ・チャウへの批判記事が掲載されたことにより、フランス当局寄りの雑誌とされ、後のヴィンへの評価を下げる一因ともなっている。

ヴィンの近代化への考えは「ベトナムの将来は、自らの過去と完全に決別し、徹底してフランス文化への同化にある」としている⁶⁾。これはフランスが宗主国であるというだけではなく、旧体制である阮朝と旧知識人への嫌悪とも取れる拒絶があるのではないだろうか。それは、彼の出自が影響しているとも考えられるだろう。貧しい農家にとっては支配する側が何にかわろうとも苦しい立場は変わらなかった。とくに儒教学者が官吏を占めるエリート階層へとたどり着くのは至難の技だった。しかしフランス統治下では、ヴィン自身が示したように、たとえフランス人になれなくとも、貧しさからの脱却を図れるのではないかと考えたのである。ゆえにヴィンが目指したのは「アジアのなかのフランス」だった。そしてそうなるためにはエリートだけのものだった文字をベトナム人全員のものにしなければならず、クオック・グーを普及するために、出版へと突き進んだのである。彼は1915年からベトナム初の日刊新聞である『中北新聞』をシュナイダーのもとで発刊し、1932年には念願のフランス語による新聞『アンナン・ヌーヴォー』は発刊した。しかし、出版に伴う借金が彼を圧迫することになったのである。1936年の3月ついに『アンナン・ヌーヴォー』の主筆から離れ、金策のためにラオスへと渡った。彼はラオスでも読者のためにラオスの文化を紹介する記事を『アンナン・ヌーヴォー』に寄稿していたが、同年5月にその地にて志半ばでその生涯を終わらせることとなった。

ヴィンは確かにフランスの政治体制や文化、思想を持ち込むことにより、ベトナムの近代化を図った。しかしそれは単にベトナムをフランス化するという単純な流れの中に自身の国をおいているのではない。それが彼の押し進めたクオック・グーからも読み取れることができるのではないだろうか。次の章ではクオック・グーと彼がクオック・グーを普及させることで何を目指したかに焦点を当てていきたい。

2. クオック・グーとグエン・ヴァン・ヴィン

ベトナムは紀元前から1000年近く中国の支配下に置かれていたため、行政関連の文章には全て漢字が使用されていた。10世紀にベトナムは中国から独立するが、依然として公式文章には漢字が使用されていた。中国の官吏採用試験が1075年にベトナムでも開始され、1919年に廃止されるまでベトナムの社会は漢字そしてそれを学んだ儒学者が中心的な位置についていた。そのため漢字はごく一部のエリートの文字とされていた。

ベトナムの文字を語る上で欠かせないのは、漢字の後にできたチューノム(字喃)である。これは漢字では書き表せないベトナム地名、人名、特産物名などを漢字文献に記すために考案された文字である。変形漢字が用いられ、口承文学的要素の強い詩歌を文字化するのには大いに役立った。チューノムを公式文字化しようとする動きもあったが、チューノムを習得するには大きな障害があった。それはチューノムが漢字から作られた文字だからである。そのためまづ漢字の素地を持っていなければ、チューノムを習得することができなかった。チューノムも多くのベトナム人とはかけ離れた文字だったのである。

このような背景のもと、クオック・グーは生み出された。17世紀中頃にカトリック宣教師たちによってベトナム語のアルファベット化が行われ、1651年、イエズス会の宣教師アレクサンド

6) 古田元夫著『ベトナムの世界史』、東京大学出版会、1995年、p.60。

ル・ドゥ・ロード (Alexandre de Rhodes, 1591-1660) による『ポルトガル—ラテン語—ベトナム語辞典』(*Dictionarium Annamiticum Lusitanum et Latinum*, 1651) が出版されたことにより広く知れ渡ることとなった。その後使用法を記した書物が出版され、文字の変更が行われながら、19世紀末には現在使われている表記法とほぼ変わらない形式が形成された。

フランスの支配下では、フランス当局が積極的にクオックグーの使用を勧めていた。これにはフランス人行政官にとって漢字よりもアルファベット表記の方が学習するには容易であることと同時に、漢字から離れることで、中国文化や儒学者たちの影響を弱める狙いもあった。当初はフランス当局からの推奨であったクオックグーだが、ベトナム人知識人たちが近代化のためクオックグーを用いたことにより、ベトナム全土への浸透が加速された。それがヴィンも所属していた「ドンキン義塾」をはじめとする、20世紀初頭の啓蒙運動である。この運動は先に記したように1908年までにフランス当局の厳しい取り締まりによって頓挫してしまうが、グエン・ヴァン・ヴィンはクオックグーの普及をその後も推し進めた。今井昭夫はヴィンのクオックグー推進論を集約し、以下のようにまとめている。

①文章は話し言葉のようであればならない。一方、話し言葉はよい文章によってより明確・完全になる。②学問を国中に普及させるには自国の文字、それも音声に基づいた文字をもたなければならない。一つの文字に複数の読み方、書き方があるのは学びにくい。その意味でチュノムは廃止すべきである。③学校教育の場においては、初等教育ではクオックグーだけ教えて、漢字もフランス語も教えるべきではない。漢字やフランス語はその次の段階で教えるべきである。④クオックグーには欠点もあるが、漢字に比べると便利である。地方による発音の相違によってクオックグーの表記の統一・標準化に問題が生じているが、それは三圻が譲り合って解決すべきである⁷⁾。

まず、自国の文字を作るにはそれを使う人が日常的に使っている言葉と直結していることが重要だった。それにはエリートの文字と言われているごく限られた人々が使う漢字を、ベトナム全土に広げるにはそぐわなかった。チュノムに関して、漢字の知識が必要とされる文字は使用できる人物を限定するため適していないとヴィンは考えた。地方によって発音が異なり、アルファベットが変わってしまうことも三圻 (アンナン・トンキン・コーチシナ) それぞれが話し合い、統一化していくことで、共同意識を高め、ベトナムの結束を強めようとした。ヴィンは以上のようにクオックグーを国の文字として普及しようとしたことが窺えるが、注目すべきは3点目に挙げられた、学習の順番である。クオックグーをまず学ばなければならない言語として考え、フランス語を第二言語と捉えていることである。「アジアのフランス」を目指すべきならフランス語は必要不可欠である。しかし、クオックグーを自国文字とすることは、フランスとの距離を広げることになる。ここにヴィンのフランスとベトナムとの距離があるのではないだろうか。エマニュエル・アフィディ (Emmanuelle Affidi) は、帝国主義において大義名分となっていた「文明化」に対してヴィンは「すでに文明を持っているベトナムをフランスに示すためにクオックグーを広め、出版を行った」と指摘している⁸⁾。国の体制や技術はフランスに倣うが、ベトナムを完全にフランス化するのではなく、フランスと対等な立場になろうと

7) 今井昭夫他著「ベトナムにおける漢字と文字ナショナリズム—漢字・漢文からローマ字表記のベトナム語へ」、『ことばと社会』、5号、三元社、2001年、p.134。

8) Emmanuelle Affidi, «Créer des passerelles entre les monde... L'œuvre interculturelle de Nguyen Van Vinh (1882-1936)», *Moussons*, n° 24, IRASIA (Institut de recherches asiatiques), Marseille, 2014, p.33.

することをヴィンは目指したのではないだろうか。それは文学の面からも考えられる。

ヴィンはフランス文学をクオックグーに翻訳した作品を出版し翻訳者として知られているが、ベトナム文学から発信することも忘れていない。彼はチューノム文学の最高峰と言われるグエン・ズー (Nguyen Du, 1765-1820) による長編叙事詩『金雲翹』(Kim Van Kieu, 18世紀末から19世紀初頭)をフランス語に最初に訳した人物である。『金雲翹』は中国の清朝初期の青心才人という作家が書いた小説『金雲翹』をもとにしている。漢字で書かれた物語がチューノムで再度書かれ、そしてクオックグーへと翻訳された。『金雲翹』がベトナム文学を代表する作品にまでなったのもクオックグーに翻訳され、多くのベトナム人によって読まれたためであろう。そしてベトナムの国民文学ともなった『金雲翹』をフランス語に翻訳することで、ベトナムにはすでに文明があり、1つの国家となりうることをインドシナのなかでヴィンは示そうとしたのではないだろうか。次章では実際にヴィンの出版物にあたり彼がインドシナにおいて出版することをどのように捉えていたのかを探りたい。

3. 『中北新聞』と『アンナン・ヌーヴォー』

3-1. ベトナム初の日刊新聞『中北新聞』

1915年に発刊された『中北新聞』はベトナム北部と中部を配布地域として誕生した。週間ニュースや至急報が一面に掲載され、その裏にコラムや地域の情報が載っている。フランスでの出版情報もあり、フランスの情報も知ることができるようになっている。社会面の記事はフランスおよびインドシナの記事が載っているが、フランス当局の許可のもと発行され、発行所がフランス人のシュナイダーということもあり、フランスを批判するような記事は載っていない。各見出しはクオックグーとフランス語の二重表記になっているが、項目以外は全てクオックグーで書かれている。新聞の最終ページは広告になっており、最初はフランス人商店の広告が出ていたが次第に減り1918年にはほとんど現地人商店の広告となっている。

一面の社会欄はフランスを取り巻く世界情勢やインドシナを訪れたフランスの要人の記事、そして彼らがインドシナで行った功績を称える記事が多く掲載されている。また後の阮朝最後の皇帝となるバオ・ダイのフランス留学の記事なども載っている。

記事のサインにグエン・ヴァン・ヴィンの名を見つけることはほとんどできないが、1919年には一面の彼の名前の横に出版管理責任者 (Administrateur-gérant) となっていることから『中北新聞』の記事全体のとりまとめを担当していたと考えられる⁹⁾。

発行時の項目は二重表記であったが、1919年からはフランス語表記が消え、クオックグーで記されている。1919年まではヴィンの上にフランス人責任者がいたが、1920年からは彼の名前が消え、責任者にはヴィンの名前しか記載されなくなったことにより、この頃からヴィンは記事に関してかなりの裁量を任せられていたことが推測できる。

新聞のなかで毎日彼の名前が記されている項目がある。それが連載形式で載っているフランス文学の翻訳の箇所である。最初はアラン＝ルネ・ルサーージュ (Alain-René Lesage, 1668-1747) の『ジル・ブラーズ物語』(Histoire de Gil-Blas de Santillane, 1715-1735) から始まり、デュマ (Alexandre Dumas, 1802-1870) の作品を翻訳している。特にデュマに関しては、『ダルタニャン物語』(D'Artagnan, 1844-1851) の『三銃士』(Les Trois Mosquetaires, 1844) や『二十年

9) 1922年の3月の時点でヴィンは社長 (Directeur) の肩書がついており、編集長 (Rédacteur en chef) にはファン・フイ・リュック (Pham Huy Luc) が就いている。発行責任者にはグエン・ヴァン・ルアン (Nguyen Van Luen) の名が記されている。

後』(Vingt ans Après, 1845)を訳し連載している。『中北新聞』は1945年まで続くが、ヴィンは同時に非常に特徴的な新聞を出版することに着手する。それがフランス語で書かれた機関紙『アンナン・ヌーヴォー』である。ベトナムの近代化のため自国の文字としてクオックグーを推奨したヴィンが『中北新聞』で成し遂げたクオックグーによる新聞の発行ではなく、新たな出版物がなぜフランス語で書かれなければならなかったのか、『アンナン・ヌーヴォー』の創刊号を頼りにみていきたい。



『中北新聞』
1915年1月14日発行

3-2. フランス語で書かれた新聞『アンナン・ヌーヴォー』

週刊紙『アンナン・ヌーヴォー』はハノイのシャンヴル通りの3番地に発行所を構え、1931年1月25日に創刊号が発行された¹⁰⁾。経営、記事全てを主筆であるヴィンが背負っており、ヴィンにとっては満を辞して発行した出版物であると考えられる。記事、コラム、小説全てがフランス語で書かれており、フランス語を学んだエリート層へ向けた出版物であることを伺わせる。1932年にパリで開催された「植民地雑誌・新聞フェア」(Une foire de presse coloniale)において『アンナン・ヌーヴォー』はグランプリを獲得した。1930年代のインドシナはフランスの統治が一定の完成を終え、インドシナの隆盛期とも言える時代だった。この時代になぜヴィンはフランス語による機関紙を出版したのだろうか。創刊号の一面に『アンナン・ヌーヴォー』を出版する目的が記されている。

アンナン人がフランス語による機関紙を出版するのは、

1. フランスの民衆に自分たちのことをよりよく理解してもらうためである。
2. 私たちが考え、やろうとしてできることを述べるためである。
3. 私たちの利益を守るためである。
4. フランス語で話し、書くすべての人たちとの間で友情と強固な繋がりを結ぶためである。

10) シャンヴル通りは現在のハンガイ通りにあたる。

5. アンナン人の解放に励みながらも、インドシナにおけるフランスの事業に誠実かつ価値のある貢献をするためである。
6. 如何なる場所から来ようとも全ての背徳的な行為に立ち向かうためである。
7. 何人かの政治と利益は常にねじ曲げられたというアンナン人の実情についてフランス語による意見を示すためである。

その機関紙は『アンナン・ヌーヴォー』と呼ばれるだろう¹¹⁾。

アンナンは、インドシナ時代においてベトナムの北部から中部にかけての呼称だったが、インドシナに関するフランス語の書物にはベトナム人を指すものとして使われていた例もあり、ここでは「アンナン人」はベトナム人の意味として用いられていると考えられる。『中北新聞』やその他の雑誌でクオックグーによる出版に関して一定の成果を上げた後、ヴィンはベトナムの文化やベトナム人の考えを世界に知らせる必要があると考えた。そしてその世界とはまずフランスの民衆だったのである。しかしそれはフランスに迎合するわけではなく、あくまでフランスと対等な立場を築くための最初の試みであったと考えられる。確かに彼は「フランス語を話し、書くすべての人々」との強固なつながりを求めていた。だが、彼の視線の先にはフランス本国だけではなく、それを越えて他のフランス植民地の国々にも向けられていた。この視線は『中北新聞』でたびたび各植民地の動向が記事にされていた点からも推測される。植民地のなかで単純化される、宗主国と被植民地という垂直構造ではなく、フランス語を使用する他の国々との水平的なつながりを築くことにより、植民地間の連帯と自立を見据えたヴィンの姿勢が読み取れる。実際にヴィンは『アンナン・ヌーヴォー』創刊号での声明の5番目で「ベトナム人の解放」を促しながら「フランスの事業に貢献する」としている。そのうえで「如何なる背徳的な行為に立ち向かう」ためにフランス語を利用しようとしたのである。『アンナン・ヌーヴォー』では『中北新聞』と同様にフランスの事業を称える記事もあるが、世界情勢 (Nouvelles du



『アンナン・ヌーヴォー』
創刊号、1931年1月25日発行

11) *L'Annam Nouveau*, n° 1, le 25 janvier 1931, Hanoi.

monde entier) の記事は表紙の裏面に当てられている。そして次にアンナン人の習慣や体制 (Coutumes et Institutions annamites) の項目が大きくさかれ、ベトナムの村の紹介をしている。また 1931 年 10 月 11 日からはヴュー・ディン・ディー (Vu Dinh Dy) の『監獄の思い出』 (Souvenirs de prison) という回想録の連載が始まっている。『アンナン・ヌーヴォー』は外に向けられた週刊紙であるとともに、ベトナムの知識人のための雑誌である。彼らが世界へ出るためにフランス語で発信する必要があったと考えられる。『アンナン・ヌーヴォー』を通して、世界とベトナムとの関係を、そして世界のなかでベトナムはどのような国家に創り上げてればよいのかという問いを、ヴィンは常に知識人たちの意識に投げかけていたのではないだろうか。順調な出発を見せた『アンナン・ヌーヴォー』ではあるが、経営面では行き詰まってしまった。ヴィンは 1936 年に『アンナン・ヌーヴォー』から離れることとなったが、ヴィン亡き後も 1942 年の 4 月まで発行は続いた。

おわりに

1940 年にはインドシナに日本軍が侵攻し、『アンナン・ヌーヴォー』は混乱のただなかでその幕を閉じることとなった。しかしながら、1940 年代はフランスの教育を受けた多くのベトナム人知識人が台頭し、独立運動へと舵を切っていった時代である。その前時代に出版を通してベトナムの近代化を試みたヴィンの功績は小さくなかっただろう。

貧しい農家出身と言われているヴィンは 10 歳にしてフランス語の才能を発揮し、自らの力で役人になる手段を手に入れた。フランス語という武器を持ったことは同時にフランス文化への憧れとつながることとなった。彼が初めて訪れた 1906 年のフランスは、植民地を拡大し、国力の増大の時期を迎えようとしていた。そのような時代にフランスを訪れたヴィンはフランスにベトナムの将来をみたのではないだろうか。彼は確かにフランスの文化、思想そして政治体制を手本にベトナムの近代化を図ろうとした。その点では彼を親仏主義者とみなすこともできるだろう。しかし彼がそこに至るにはまず、フランスの侵攻の前に長きにわたってベトナムを統治していた阮朝、そして儒教学者への失望もあったのである。これは当時の体制に対する批判的な視線とみなすこともでき、ヴィンはジャーナリスティックな視線をすでに獲得していたと考えることもできる。

フランスの知識を獲得してベトナムを近代化することは、フランスへの迎合を意味しない。ベトナム近代化への手段として彼が実践したのは、政治的には「ドンキン義塾」への参加であり、教育的にはクオックグーの普及活動である。フランスの植民地拡大への大義名分である「文明化」に対して、すでに文明を持っているベトナムを外部に見せるためには共通の言語となるフランス語を使う必要があった。そしてベトナム人もまた文字を読み自らの考えを述べる必要があったのである。そのためクオックグーによる日刊新聞『中北新聞』発行はヴィンにとって悲願でもあったと言える。

そして、クオックグーの普及が進んだ時、彼は新たな段階へと進んだ。それがフランス語による機関紙『アンナン・ヌーヴォー』の刊行である。ベトナムの未来を作っていくエリートたちが世界を知り、世界に自分たちのことを知ってもらうためにフランス語を武器として使うようにヴィンは彼らを導こうとしたのではないだろうか。

本研究はグエン・ヴァン・ヴィンに関する彼の出版物とフランスとの距離を測る一考察である。ヴィンに関してはまだ多くの出版物があり、『中北新聞』も『アンナンヌーヴォー』もまだ多くの分析の余地を残している。またインドシナはベトナムだけではなく、カンボジア、ラオスも統合されていることからこの 2 つの国の状況も考慮に入れなくてはならない。なぜなら、

ヴィンはラオスにも活動の場を見出そうとしており、インドシナ全体の近代化を志向していたとみなせるからである。本論文を足がかりとして、インドシナにおけるベトナム人知識人の社会・文化活動の研究を進めていきたい。

【主要参考文献】

グエン・ヴァン・ヴィン発行の新聞

『中北新聞』 (*Trung Bac Tan Van*, 1915-1945), Hanoi.

『アンナン・ヌーヴォー』 (*Annam Nouveau*, 1931-1942), Hanoi.

(欧文文献)

Affidi, Emmanuelle, «Créer des passerelles entre les monde... L'œuvre interculturelle de Nguyen Van Vinh (1882-1936)», *Moussons*, n° 24, IRASIA (Institut de recherches asiatiques), Marseille, 2014.

Goscha, Christopher E., «Le barbare moderne» : Nguyen Van Vinh et la complexité de la modernization colonial au Vietnam, *Outre Mers. Revue d'histoire*, Société française d'histoire des outre-mer, Paris, 2001.

Jameson, Neil L., *Understanding VietNam*, University of California Press, London, 1993.

Nguyen Lan Binh (dir.), *Nguyen Van Vinh la ai?*, Nha Xuat Ban Tri Thuc, Hanoi, 2013.

Trinh, Van Thao, L'idéologie de l'école en Indochine (1890-1938), *Tiers-Monde* t, 34, n° 133, 1993.

Xuan, Phan Le, «L'enseignement du Vietnam Pendant la période coloniale, 1862-1945 : la formation des intellectuels vietnamiens», Education, Université de Lyon 2018.

(邦語参考文献)

古沢常雄著「フランス領インドシナにおける教育法制（1917年）」、『法政大学キャリアデザイン学部紀要』、6号、法政大学、2009年。

古田元夫著『ベトナムの世界史』、東京大学出版会、1995年。

古田元夫著「ベトナム知識人の八月革命と抗仏戦争ーヴー・ディン・ホエを中心に」、『東南アジア史 8』、岩波書店、2001年。

今井昭夫他著「ベトナムにおける漢字と文字ナショナリズムー漢字・漢文からローマ字表記のベトナム語へ」、『ことばと社会』、5号、三元社、2001年。

斎藤若菜著「フランス植民地下ベトナムにおける初等教育：仏越学校現地人教員の活動を中心に」、『待兼山論叢。文化動態論篇』、47号、大阪大学、2013年。

本論文は、JSPS 科研費 17K18170 (研究代表者、河野美奈子) による研究成果の一部である。